

『史劇 楠公訣別』(1921年)の 可燃性ネガフィルムを同定する

板倉史明

はじめに

1921(大正10年)年11月20日(日)から12月10日(土)までの3週間、御茶ノ水の湯島聖堂内にあった「東京博物館」(現・東京国立博物館および国立科学博物館)¹⁾において、日本初の官製映画展覧会である「活動写真展覧会」が開催された。²⁾ 文部省が主催したこの展覧会については、青少年たちに悪影響を与える娯楽だとして有害視されていた映画の社会的な地位向上に貢献し、また、「この展覧会を機縁に、全国活動写真業者大会や、映画説明者協会、映画雑誌協会などの各種連絡団体が生れ、[中略]各方面に映画文化の向上を目指す企てが始められた」³⁾ 画期的なイベントとして、映画史家のあいだで位置づけられている。⁴⁾ 実際、「活動写真展覧会」の総入場者数は会期中13万人を超え、1916年から1924年までに東京博物館がたびたび実施していた各種「特別展覧会」のなかでも3番目に集客数の多いものであった。⁵⁾

「活動写真展覧会」の社会的な成功を決定付けたのは、会期末の12月8日に、当時の摂政宮(後の昭和天皇)が展覧会を視察したことであり、それらの映像記録は、現在2本のフィルム——『摂政宮殿下 活動写真展覧会御台覧実況』および『史劇 楠公訣別』——として現存している。各映画会社がこのイベントを重視していたことは、撮影のわずか4日後に、「一斉に各会社の常設館で特別番外として上映」⁶⁾ したことから容易に推測することができる。⁷⁾

本稿では、東京国立近代美術館フィルムセンター(以下:NFC)に所蔵されている2本のフィルム(『摂政宮殿下 活動写真展覧会御台覧実況』および『史劇 楠公訣別』)のうち、特に『史劇 楠公訣別』の可燃性ネガフィルムに対して微細な分析を加えることを通じて、フィルム・アーカイブ的な観点から、フィルムが有する歴史資料としての価値を同定しようと試みるものである。これまで『史劇 楠公訣別』は、大正期の希少な記録映像としてしばしば映画史のなかで言及されてきたが、その撮影プロセスやショット単位での分析はほとんどなされてこなかった。モノとしてのフィルムに残されたあらゆる痕跡から、フィルムの製造年や編集の方法などを特定してゆく本稿の分析手法は、フィルムそれ自体に対する理解のみならず、フィルムに焼き付けられた映画作品やそのフィルムの受容形態に関するより深い理解にもつながるはずである。

当該フィルムの分析に入るまえに、まずは1921年12月8日の摂政宮の台覧がどのようなプロセスで実施され、2本の映画がどのように撮影されたのかを跡づけておく必要があるだろう。

『攝政宮殿下活動寫真展覽會御台覽実況』と『史劇 楠公訣別』の撮影経緯

1921年12月8日、摂政宮は午前8時40分に東宮仮御所を出発して活動写真展覽会の会場へ向かい、午前9時ごろに会場に到着。そして東京博物館長・棚橋源太郎の先導によって各陳列品を観覧した。⁸⁾ 観覧の途中、附属の映写室において、皇太子が摂政宮に就任する以前の同年3月から9月にかけてはじめて渡欧した際の記録映画である『皇太子殿下御外遊実況』などを数巻見た⁹⁾あと、「聖廟大成殿前にて尾上松之助一派の楠公訣別の実演を御覧に」¹⁰⁾なり、10時30分に展覽会場を後にした。¹¹⁾

現存する2本のフィルムを上記の摂政宮の当日の行動のなかに位置づけるならば、『攝政宮殿下 活動寫真展覽會御台覽実況』は、前半の展覽会場の視察風景を記録したもので、『史劇 楠公訣別』が後半の尾上松之助の実演を見学する摂政宮を捉えたものであるといえる。ただし、『攝政宮殿下 活動寫真展覽會御台覽実況』のメインタイトル画面には、「摂政宮殿下 活動寫真展覽會御台覽実況」の下に小さな文字で「並 尾上松之助主演 楠公父子櫻井駅の別れ」とも書かれており、もともと『攝政宮殿下 活動寫真展覽會御台覽実況』と『史劇 楠公訣別』の2本の内容はセットになって編集・公開されていたバージョンも(その他のバージョンのなかのひとつとして)存在したことを類推させる¹²⁾(詳細は後述)。

まずは、2本の現存フィルムの入手経路がまったく異なるため、それぞれのフィルムについて詳細を解説してゆこう。NFCが所蔵する『攝政宮殿下 活動寫真展覽會御台覽実況』は1960年代末にアメリカの議会図書館から日本へ戻ってきたいわゆる「返還映画」の1本である。返還映画の来歴については、戦前にアメリカの日系人社会に流通していたフィルムをアメリカ軍が戦時中に接収したものであるか、またはGHQ占領期に戦前・戦中の日本映画を没収してアメリカに持ち帰ったかのいずれかであるが、この『攝政宮殿下 活動寫真展覽會御台覽実況』のフィルムがどちらであるのかは現時点で不明である。1960年代に議会図書館から返還された『攝政宮殿下 活動寫真展覽會御台覽実況』のフィルムは35mmの可燃性プリントであったが、日本において35mmの不燃性インターネガ、およびインターネガから複製した35mm不燃性プリントを作成し、1973年にNFCが実施した上映企画「日本の記録映画特集—戦前篇—」(1973年1月18日～3月31日)においてお披露目上映された。¹³⁾ 長さは206フィート5コマ(約62.8m)で、秒間16コマで映写すると約3分26秒である。内容は、摂政宮が展覽会場に車で到着し、展示物を観覧したあと屋外にて、松竹蒲田撮影所が製作した『悪夢』(田村宇一郎監督、1921年7月15日封切)における東京市大火災シーンのミニチュアセットを見学し、その後、尾上松之助一派の実演会場に通じる階段を上りきったところまでが記録されている(尾上松之助一派の映像はまったく含まれていない)。

一方、NFC所蔵の『史劇 楠公訣別』は、2006年に日活株式会社より寄贈された35mmの可燃性ネガフィルムである(以下「日活版」と称す場合がある)。摂政宮が階段を上りきって松之助の実演会場に到着したところから始まり、続いて正成と正行の父子の別れの場面を尾上松之助一派が演じる場面が映し出され、その演技の途中でフィルムは突然終わる。長さは1053フィート(約320.9m)あり、秒間16コマで映写すると約17分33秒の長さを持つ。

なお、プラネット映画資料図書館も、摂政宮が活動写真展覽会を台覧した時の記録映像の16mmプリントを所蔵しているが(タイトル部分が欠落しているためプラネット版に付されていた題名は不明)、そこには、摂政宮が松之助一派の実演を見学し終わったあと、博物館の門を出て車で帰ってゆく場面も取

められている(約68.4フィート)。なお、このプラネット版にしか存在しない場面には「還啓」という文字が入ったインタータイトルが挿入されているが、その字体や字幕のデザインは、NFC版の『攝政宮殿下 活動寫眞展覽會御台覽実況』に含まれているインタータイトルの字体やデザインとまったく同じであった。この事実からも、『攝政宮殿下 活動寫眞展覽會御台覽実況』と『史劇 楠公訣別』の2本に含まれる映像は、元々ひとつの作品としてまとめられたバージョンも存在したことが推測される。

ところで、摂政宮台覧の記録映像が撮影された経緯について、当時の映画雑誌に次のように書かれている。当初、政府の関連部局から日活と松竹だけに撮影の依頼があったが、大活と国活が、自分たちも撮影に参加できないなら活動写真展览会への展示協力を拒否すると主張したため、「あらためて各会社を参同して公平に抽選で決めることにした処が、天公すこぶる茶目氣を出したものと見えて同撮影[尾上松之助一派の楠公訣別の実演のこと：引用者による注]の権利は大活に、国活は会場正面を、日活と松竹は会場内を撮すことになって、台覧実演『楠公』の原版はとこしえに大活の秘宝となった」というのである。¹⁴⁾

上記の雑誌記事を字義通りに解釈するならば、松之助一派の実演が記録された『史劇 楠公訣別』の場面は、大活だけに許可された撮影であったことになる。ただし既に記したように、NFCに現在所蔵されている可燃性フィルムは、日活から寄贈されたものであり、かつフィルムの冒頭部分には「日活会社秘蔵ノ教育寫眞」という文字の入った字幕が挿入されており、雑誌記事の情報と現存するフィルムとの整合性が取れない。

現時点で明確な断定はできないが、撮影の経緯について以下のような可能性を想定することができるだろう。撮影場所については、当時の批評家の記述したとおりに各会社で役割分担が決まっていたのかもしれない。ただし、それらのネガフィルムを編集して一般公開するにあたっては、各社が共同でネガを持ち寄って編集し、ひとつの作品としてまとめたのではないかという可能性である。¹⁵⁾ 仮に批評家の言うとおりに「国活は会場正面」、「日活と松竹は会場内」の映像だけしか撮影および使用ができなかったとすれば、(特に)会場正面の様子だけしか素材がない国活は、摂政宮の台覧に関する記録映画を「記録映画」作品として完成できなかったのではないだろうか。実際、先述したとおり、NFC版『攝政宮殿下 活動寫眞展覽會御台覽実況』のタイトル画面には、「摂政宮殿下 活動写真展覽會御台覽実況 並 尾上松之助主演 楠公父子櫻井駅の別れ」と書かれており、各会社が撮影した場面がすべてひとつにまとめられたバージョンが過去に存在した痕跡も確認できるのである。

それでも、なぜ大活が撮影し、かつ保有していたであろう楠公訣別のネガフィルムを日活が保有していたのかという問題が残されている。その点について、大活が保有していた『史劇 楠公訣別』のネガフィルムを、後に日活が譲り受けて管理していたという推測は可能であろう。なぜなら大活は活動写真展览会が実施された翌年の1922年に映画製作を中止し、1927年には解散した会社である。したがって、大活が解散したときに、大活が保有していたネガ類の一部を日活に託したのではないだろうか。そもそも『史劇 楠公訣別』というフィルムは、尾上松之助という当時日活の重役で、かつ専属の時代劇トップスターが主演した記録映像である。そうであれば、なおさら日活に譲渡されるのは自然な流れだといえるだろう。さらに、日活が2006年まで所蔵していた可燃性ネガフィルムは、フィルムの冒頭と結尾のタイト



図1 タイトル画面 (No.1)

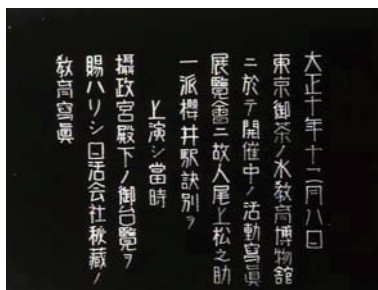


図2 解説字幕 (No.2)

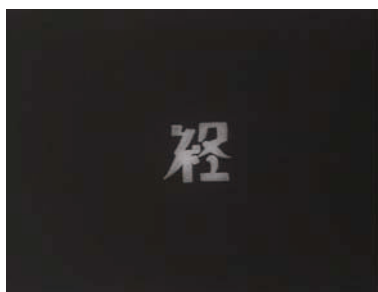


図3 結尾の「終」(No.33)



図4 EKのイヤーマーク「■■」=1920年製造を表す

ル部分を除けば、まさに大活が撮影を担当した「楠公決別の実演」部分のみであり、そのほかの博覧会場や正面玄関等の映像は皆無であることも、このフィルムが大活から日活へ移譲されたネガフィルムである推論を補強してくれるだろう。

NFC所蔵『史劇 楠公訣別』の可燃性フィルムから見てくるもの

これまで摂政宮台覧の記録映画が撮影された経緯のいくつかの可能性について確認してきたが、それらの文脈を踏まえた上で、本節では、NFCが所蔵する「日活版」のネガフィルムをフレーム単位で調査することによって、この可燃性フィルムがいつ、どのような形で撮影され、編集されたのかを分析してみたい。

表1は、フィルムのつなぎ目(スプライス)ごとにフィルムを分割し、各部分のフィルムの長さや製造会社、そしてフィートナンバー(1フィートごとに生フィルムにあらかじめ焼き付けられている番号)を記したものである。

この可燃性ネガフィルムは、全部で33枚のフィルム・ストリップがつなぎあわされたものである(それぞれのストリップにNo.を付した)。冒頭の2枚のタイトル部分(No.1:図1、No.2:図2)とエンドの「終」字幕(No.33:図3)にはアグファ社製のフィルムが使用されているが、それ以外はすべてイーストマンコダック社(以下EKと標記)が製造したフィルムである。EKのフィルムには、製造年を特定することのできるイヤーマークが付されていることが多いが、1928年にフィルムが製造されたことを示す「●●」が記されたNo.3を除き、すべて1920年(■■:図4)か、または1921年(▲▲)に製造されたフィルムであることがわかった。¹⁶⁾ いうまでもなく楠公決別の実演は1921年12月8日に実施されたのであるから、同年または前年に製造されたフィルムが撮影時に使われていたことは十分に考えられる。このことから、「日活版」の本篇のフィルムは、撮影時にカメラに装填されていた「カメラネガ」(=オリジナルネガ)フィルムである可能性ができた。

表1

No	該当コマ数(始)	該当コマ数(終)	ショットの長さ	エッジコード	フィルム製造年	内容	カメラ位置	フィートナンバーおよび備考
1	画頭から	15f08	15f08	AGFA	不明	タイトル 「史劇 楠公訣別」		フェードイン
2	15f09から	46f09	31f00	AGFA	不明	字幕「大正十年 十二月八日…」		フェードイン
3	46f10から	50f06	3f12	KODAK ●●● NITRATE PANCROMATIC	1928	森の映像		6E66785-6E66787
4	50f07から	106f11	56f04	EK ■■	1920	摂政宮からバン	C1	6C48927-6C48983。
5	106f12から	118f08	11f12	EK ■■	1920	摂政宮からバン	C1	6C48984-6C48995。
6	118f09から	149f15	31f06	EK ■■	1920	摂政宮からバン	C1	6C48996-6C49026。
7	150f00から	167f02	17f02	EK ■■	1920	摂政宮からバン	C1	6C49060-6C49077。
8	167f03から	235f11	68f08	EK ■■	1920	舞台を後ろから	C5	5C93742-5C93810
9	235f12から	243f08	7f12	EK ■■	1920	舞台を後ろから	C5	5C93811-5C93818
10	243f09から	254f11	11f02	EK ■■	1920	舞台を後ろから	C5	5C93819-5C93829
11	254f12から	271f15	17f03	EK ■■	1920	舞台前から1	C4	3B24159-3B24175
12	272f00から	287f00	15f00	EK ■■	1920	舞台前から1	C4	3B24176-3B24190
13	287f01から	292f14	5f13	EK ■■	1920	舞台前から1	C4	3B24192-3B24196
14	292f15から	311f10	18f11	EK ■■	1920	舞台前から1	C4	3B24198-3B24216
15	311f11から	356f05	44f10	EK ■■	1920	舞台前から1	C4	3B24262-3B24290
16	356f01から	468f13	112f12	EK ■■	1920	舞台前から2	C3	5D25212-5D25294
17	468f14から	542f15	74f01	EK ■■	1920	舞台前から2	C3	5D25296-5D25369
18	543f00から	550f11	7f11	EK ▲▲	1921	松之助と子役	C2?	1D53370-1D53376
19	550f12から	573f01	21f05	EK ▲▲	1921	松之助と子役	C2?	1D53377-1D53399
20	573f02から	592f07	19f05	EK ■■	1920	舞台前から2	C3	5D25385-5D25404
21	592f08から	622f00	27f08	EK ■■	1920	舞台前から	C4	2B22190-2B22219
22	622f01から	721f00	98f15	EK ■■	1920	舞台前から (定行退場)	C4	2B22220-2B22318。 フェードアウト。
23	721f01から	757f05	36f04	EK ■■	1920	引きのショット。 定行入ってくる	C4	4C20131-4C20166。 フェードイン。
24	757f06から	838f02	80f12	EK ■■	1920	引きのショット	C4	4C20167-4C20247
25	838f03から	853f06	15f03	EK ▲▲	1921	松之助近写	C2?	1D53407-1D53422。
26	853f07から	895f13	42f06	EK ▲▲	1921	松之助と子役2	C2?	1D53423-1D53465
27	895f14から	943f03	47f05	EK ▲▲	1921	松之助と子役2	C2?	1D53466-1D53512
28	943f04から	958f04	15f00	EK ■■	1920	舞台前から2	C4	4C20248-4C20263
29	958f05から	972f02	13f13	EK ■■	1920	舞台前から2	C4	4C20264-4C20277
30	972f03から	988f10	16f07	EK ■■	1920	舞台前から2	C4	4C20278-4C20293
31	988f11から	1047f09	58f14	EK ■■	1920	舞台前から2	C4	3B24097-3B24156。 上記ショットと同じ カメラの可能性高い。
32	1047f10から	1049f04	1f10	EK ■■	1920	舞台前から2	C4	3B24157のみ
33	1049f05から	1053f00	3f11	AGFA	不明	「終」		フェードアウト

さらにこの推論を補強するのは、「日活版」のフィルムにおけるつなぎ目の多くが、撮影するカメラの位置が変わるごとに存在していることである。このことは、このフィルムがショットごとに編集されていることを示しており、通常そのような編集がなされるのはカメラネガをつないだオリジナルネガの場合のみである。仮に、この「日活版」のネガフィルムがオリジナルネガではなく、そこから複製を重ねられたいわゆる「デュープネガ」のフィルムであれば、これほどショット単位でつなぎ目が存在するはずはない。焼付機を通った際に入った多少の傷は存在するにせよ、なによりネガフィルム上に記録された画のクオリティの高さ(画のシャープネスや豊かなコントラスト)が、この「日活版」はオリジナルネガだということを雄弁に物語っているといえよう。

つぎに、この「日活版」のフィルムがどのように編集されているのかを確認してみよう。『史劇 楠公訣別』の映像を見ると、尾上松之助一派の舞台を囲むように、複数の映画カメラによって撮影されていることがわかるだろう。現存する「日活版」で確認できる範囲で言えば、少なくとも5台の映画カメラによって同時に撮影されている。なぜ5台のカメラが同時に回っていたのか。それはいうまでもなく摂政宮の台覧という一度きりの出来事を撮影する際に、カメラマンの都合でリテイクや取り直しはできないので、さまざまな角度から複数のカメラで同時に撮影して確実に映像記録として残さなければならなかったためであろう。

『史劇 楠公訣別』の撮影時における各カメラ位置をいくつかの写真で確認してみよう。図5は摂政宮を最も近い位置から撮影しているカメラ(C1)である。図6の3台(左からC2、C3、C4)は、尾上松之助一派の実演の様子を正面から写しているカメラであり、図7(C5)は摂政宮を遠くから捉えるとともに、松之助一派の演技を背後から捉える役割も果たしている。¹⁷⁾

編集上、興味深い点は、No. 17とNo. 18のショット(図8-9)のつながりが、いわゆる「アクションつなぎ(Match on Action)」のルールにしたがって編集されている点である。一般的に、アクションつなぎとは、被写体の運動(アクション)の途中でショットを転換させることによって、ショット転換をできるだけ観客に意識させないようにする技法である。ここでは、楠木正成が息子の楠木正行に形見の刀を受け渡すというアクション(No. 17)の途中で、より被写体に近い位置から撮影された2人のショット(No. 18)に転換するわけだが、No. 18もまた、楠木正成が正行に刀を受け渡すというアクションからはじまっており、アクションつなぎの技法が使用されていることがわかるだろう(若干アクションが重複しているために、ぎこちないものではあるが)。この事実が示すことは、少なくともこの部分の編集は、映画編集の約束事に

図5 C1カメラ(画面奥中央)



図6 左から順にC2、C3、C4カメラ



図7 C5カメラ(画面奥右側)





図8 アクションつなぎ1 (No.17の終わり)



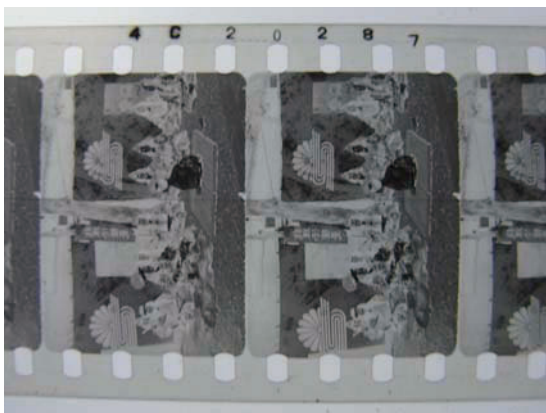
図9 アクションつなぎ2 (No.18のはじめ)

したがってなされた作為的なものであり、単に素材フィルムを順番に繋ぎ合わせた素材ではないということである。

ただしその一方で、楠公決別の物語における時系列が不自然であり、同一のアクションが、カメラ位置を換えて2度繰り返されているという奇妙な点もある。物語上の時系列が不自然であることは、まずNo. 8において、C5の位置から、楠木正成(松之助)が楠木正行(松葉)に形見の刀を渡して涙の別れをする場面が記録されているが、No. 17とNo. 18のショットでも同様の場面が映し出されている点にもっとも端的に現れている。

時系列が不自然であることは、各フィルムのエッジに記されているフィートナンバーからも確認することができる(図10)。フィートナンバーのうち、最初の2桁の数字とアルファベット(「日活版」では6E、6C、5C、3B、5D、1D、2B、4C)は、当該のフィルムが製造されたときに使用されていた乳剤の番号や、フィルムの裁断するまえの大きなシートを管理する番号をあらわしていると推測され、この2桁の数字と記号が異なることは、装填した生フィルムのロールがそれぞれ異なることを示している。そのあとに、それぞ

図10 エッジに記されたフィートナンバー(4C20287)



れ5桁の数字が記載されているが、それが1フィートごとに記されているフィートナンバーである。通常、撮影する際にフィートナンバーは数字の小さいものから大きいものへと進んで行くので、このナンバーを見れば、撮影された順序を特定することができるのである。「日活版」の中盤にあるNo. 11からNo. 15までのフィートナンバーは、つなぎ目ごとにある若干の欠落部分を除けば、3B24159から3B24290まで、同じ生フィルムが連続して使用されていることがわかる。しか

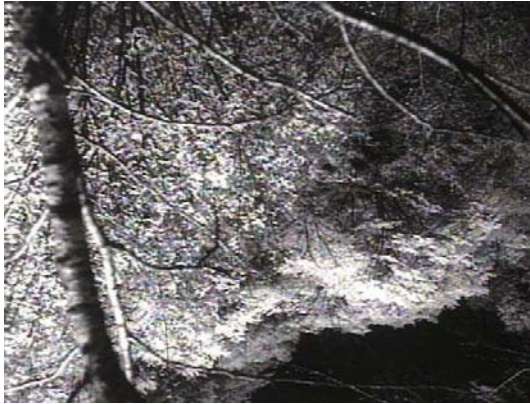


図11 森の映像が写された短いショット (No.3)

し、「日活版」の最後の場面であるNo. 31とNo. 32は、それぞれ3B24097から3B24157までの連続するフィートナンバーであり、No. 11からNo. 15の場面より前に撮影されたものであることがわかる。¹⁸⁾

このような事実から、以下の可能性が推測できるだろう。当時の新聞広告に記された映画題名や、戦前の検閲記録から推測すると、1921年12月の封切り当時から、摂政宮の活動写真展覧会の台覧を映し出した記録映画には複数のバージョンが存在した可能性が高い(註12を参照)。摂政宮

による展示物の観覧の様子をメインテーマにしたバージョンもあれば、尾上松之助の実演の光景をメインにしたバージョンもあり、またその両方を含んだバージョンもあったようである。現存する「日活版」は、そのなかで尾上松之助一派が楠公決別を演じた部分のネガフィルムを再編集したものではないだろうか。おそらく日活は、この歴史的なイベントの素材をできるだけ活用して公開しようと試み、冒頭に2枚の字幕を付したうで、物語の時系列にそぐわないショットであっても、また重複しているショットであっても、入れ込んで編集したのかもしれない。

では最後に、「日活版」のネガフィルムが、いつ現状のバージョンとして再編集されたのかという点を考察してみたい。その手がかりはNo. 2の字幕にある(図2[48頁]を参照)。

大正十年十二月八日 東京御茶ノ水教育博物館 ニ於テ開催中ノ活動寫眞展覧會ニ故人尾上松之助
一派櫻井駅訣別ヲ 上演シ當時 攝政宮殿下ノ御台覧ヲ 賜ハリシ日活会社秘藏ノ 教育寫眞

まず「故人尾上松之助」と表現していることから、尾上松之助が死去した1926年9月11日以降にこの字幕が付されたことが推測できる。さらに「当時摂政宮殿下」とも記述されているので、早くとも昭和時代が始まった1926年12月26日以降にこの字幕が付されたと考えていいだろう。

もうひとつの判断材料は、No. 2の字幕と、No. 4以降の本篇の間に差し込まれている短い森のショットである(No. 3、図11)。このわずか3フィート2コマのフィルムには「KODAK ●●● NITRATE PANCROMATIC」というエッジコードが記載されていることから、1928年か1948年に製造されたフィルムであることがわかる。この森の映像のフレームサイズがサイレント期に使用されていたフルフレームであることや、1948年に日活は映画製作を中止していたことを考えると、この森の映像が記録されたフィルムは1928年に製造されたものだと断定しても問題ないだろう(コダック社のパンクロマティックフィルムは、1922年にポジフィルムが、1928年にはネガフィルムが発売されているので、时期的にも問題な

い)。だとすれば、現存する「日活版」として再編集がなされたのは1928年以降であることが明らかになった。

おわりに

資料が少ないために解明されていない部分がいくつか存在するが、これまでの調査結果をまとめるならば、以下になるだろう。「日活版」の可燃性ネガフィルムにおける本篇部分の素材は、1921年12月8日に大活のカメラマンたちが撮影したオリジナルネガである可能性が高い(撮影後、ネガフィルムの所有が大活から日活に移り、NFCに寄贈される2006年まで、日活が保存していた)。そして日活は、1928年以降、そのオリジナルネガに対して冒頭の2枚の字幕(No. 1, No. 2)と「終」マーク(No. 33)、さらにNo. 3の森のショットをあらたに付したうえで、再編集して公開した可能性が高い(現時点において、この「日活版」がいつどこで公開されたのかは不明)。

そもそも、オリジナルネガとはもともと映像の質の高いフィルム素材であり、フィルム保存の観点からはもともと重視する素材であるが、「日活版」の映像のクオリティは極めて高く、寄贈されたときのフィルムの保存状態も良好であった。総合的に検討して、この「日活版」のネガフィルムは、現存する日本映画のフィルムとしては、1910年に撮影された現・ライオン株式会社の創業者である小林富次郎の葬儀を記録した『小林富次郎葬儀』(吉沢商店製作)の35mm可燃性オリジナルネガ(NFC所蔵)に次ぐ、2番目に古い35mmの可燃性オリジナルネガ素材であると断定してよいだろう。また、映像内容としては、日本初の活動写真展覧会の様子を記録する映像として、また、関東大震災によって建物のほとんどが倒壊してしまった湯島聖堂、およびその中に存在した東京博物館の被災前の映像として、歴史資料的な価値の高い映像であると評価できる。

付記：引用文中、旧字体を新字体に、漢数字をアラビア数字に、また読みやすいように句読点を加えた部分がある。執筆に当たっては、大矢敦子氏(立命館大学大学院文学研究科D3/衣笠総合研究機構RA)、そして査読委員の方々から貴重なコメントをいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。本稿は平成21年度科学研究費若手研究(B)「可燃性フィルムの安全保存に関する基礎的研究」(課題番号：207006660001)の成果の一部である。

註

- 1) 「東京博物館」は以下のように名称がたびたび変更されているが、本稿では特に断りのない限り、便宜的に「東京博物館」で統一する。1871年に湯島聖堂内の大成殿が博物館として開館したあと、1875年に名称が「東京博物館」になり、1877年にはさらに「教育博物館」と改称。その後「活動写真展覧会」が実施される直前の1921年6月24日に「東京博物館」に再び改称し、1931年2月には「東京教育博物館」と改称している。湯島聖堂の歴史については『写真と図版で見る 史跡 湯島聖堂』(財団法人斯文会、出版年未記載)を参照した。
- 2) 日本における映画博覧会の歴史については、岩本憲児「映画展覧会の軌跡と映画博物館への夢」(『シネマの世紀 映画生誕100年博覧会』川崎市市民ミュージアム、1995年、8-13頁)に詳しい。13頁には「活動写真展覧会出品目録」の写真が掲載されている。
- 3) 田中純一郎『日本教育映画発達史』(蝸牛社、1979年)、46頁。
- 4) なお、戦前から戦後にかけて教育映画の分野で多大な貢献をなした青地忠三は、「活動写真展覧会」が実施された当時の東京博物館の主事を務めており、そのことがきっかけとなって、フィルム機材等を輸入していた岡本洋行に移籍して映画界に入ることになった。

- 5) 東京博物館は1916年から1924年の間に18回もの各種展覧会を実施した。福井庸子は、東京博物館が積極的に行っていた各種展覧会について、1924年に文部省内にはじめて社会教育課が創設されるまでの先駆的な社会教育的イベントであったと位置づけている。「活動写真展覧会」は映画史における位置づけのみならず、より幅広い視点から相対化する必要があるだろう。福井庸子「東京教育博物館「特別展覧会」に関する考察—社会教育体制移行の過程に注目して—」(『文化資源学』第5号、2007年、43-51頁)を参照。なお、東京博物館は、「活動写真展覧会」を実施する数年前から映写室を設置しており、大正8年度には254回、大正9年度には250回の映画上映会を実施している(1920年と1922年版の『東京教育博物館一覽』東京教育博物館)。さらに、各種展覧会において東京博物館は独自に映画作品を製作・上映しており、積極的に映画メディアを教育に活用していたことが伺われる(棚橋源太郎「活動写真の教育上の価値=映写室の設備のない学校は時代遅れという事になるう=」『活動画報』第6巻第1号、1922年、37頁)。
- 6) 山中千代子「活展後日譚」(『活動画報』第6巻第2号、1922年2月号)、101頁。たとえば、『東京朝日新聞』の1921年12月12日号には、映画製作会社の大正活映(大活)の直営映画館である千代田館において、通常上映している日本劇映画とともに、『摂政殿下実演台覧の光景』を上映する広告が掲載されている。
- 7) 松之助映画の製作拠点である京都では、1921年12月16日に日活契約館である帝国館と朝日館において、「楠公桜井駅決別(または楠公桜井駅の場面)」という題名で新聞に広報され、封切られた(大矢敦子「尾上松之助映画京都封切リスト(中)」『NFCニューズレター』No64、2005年、15頁)。
- 8) 展覧会に出品された各種展示物については、「文部省主催 活動写真展覧会と本社の活躍」(『活動倶楽部』第5巻第1号、1922年1月号、82-83頁)の出品目録や、「文部省主催 活動写真展覧会記念録」(『活動倶楽部』第5巻第2号、1922年2月号、32-39頁)を参照されたい。
- 9) 教育映画等を無料で上映する普通の上映会と、特別室において有料で行う上映会の2種があった。特別室の上映では、日活が提供した『紅葉狩』(1899)や尾上松之助の映画主演第1作である『碁盤忠信』(1908)も上映された。
- 10) 「皇太子殿下 活動写真展覧会御観覧」(『社会と教化』第2巻第1号、1922年1月号)、15頁。
- 11) 「摂政宮の活動展啓」(『活動画報』第6巻、第2号)、127頁。
- 12) 1927年から1930年の間に内務省で検閲された映画のうち、NFC所蔵の『攝政宮殿下活動写真展覧会御台覧実況』と『史劇楠公決別』に関連するものが少なくとも5本あり、それぞれ検閲時のタイトルや長さが異なっている。このことから、活動写真展覧会の記録映画は複数のバージョンが当時存在したことが推測でき、NFC所蔵の2本がどのバージョンなのかを特定することは極めて難しい。以下は『映画検閲時報』に記載されていた関連フィルムのリストである。

検閲日	検閲番号	映画題名	備考
1927.3.15	B3733	小楠公尾上松之助台覧劇	35mm、1巻、134m、日活製作・検閲申請
1927.8.4	B10124	摂政宮殿下活動写真展覧会御台覧実況	35mm、1巻、127m、東洋商会製作、豊州キネマ社申請
1928.4.6	C3422	東宮殿下活展啓と楠公	35mm、2巻、441m、日活製作・検閲申請
1930.4.1	E4063	活動写真展覧会へ皇太子殿下御台覧	35mm、1巻、268m、日活製作・検閲申請
1930.11.20	E14766	摂政宮殿下活展啓	35mm、1巻、167m、大阪毎日新聞社製作・検閲申請
1930.12.22	E16626	史劇 大楠公	35mm、2巻、500m、日活製作、荻野直二郎検閲申請

- 13) 当時の日本では、映画フィルムを取り扱う団体や業界の通例として、元素材としての可燃性プリントはその後廃棄されたため、現存していない。
- 14) 山中千代子「活展後日譚」(『活動画報』第6巻第2号、1922年2月号)、101頁。
- 15) 例えば1928年11月に開催された昭和天皇の即位の大礼時には、複数の映画会社が共同で「御大禮譚寫團」を結成し、その一大イベントの様子を撮影している。
- 16) 厳密に言えば、「●●●」は1928年か1948年か1968年の製造を意味し、「■■■」は1920年か1940年か1960年か1980年の製造を意味し、さらに「▲▲」は1921年か1941年か1961年か1981年に製造されたフィルムであることを示す記号である。た

だし可燃性フィルムが製造されていたのは1950年代初頭までであり、かつ、後述するようにショットごとにつなぎ目があるフィルムであることから、それぞれ「●●●」は1928年製造、「■■」は1920年製造、「▲▲」は1921年製造のフィルムであると判断した。

- 17) C2とC3の2台のカメラは、その形状から「ユニバーサルD型」であると思われる。(『展覧会 映画遺産 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより』(東京国立近代美術館、2004年、25頁)。
- 18) なお、1921年のフィルムストックが使用されたNo. 18、19、25、26、27は、すべて尾上松之助や尾上松葉を近写したショットである。これらの寄りのショットを撮影するためにはカメラを被写体の間近まで近づけなければならないが、現存するフィルムの映像内にはそのようなカメラの存在は確認できない。したがって、摂政宮の台覧が終了した後に、同じ場所、同じ俳優、同じセットで撮影されたのではないだろうか。なぜならNo. 26とNo. 27は、フィルムのフィートナンバーが連続しているにもかかわらず、カメラの立ち位置が異なっているのである。これは明らかに、一度カメラの撮影と中断し、俳優たちの演技も中断させてからカメラの位置を移動させたことを示している。そもそも摂政宮と舞台の間にカメラを置き、カメラマンが摂政宮に背中を見せる形で視界を遮ることを想像することは難しい。なお、『攝政宮殿下 活動寫真展覧會御台覧実況』において、屋外に設置された映画作品『悪夢』のミニチュアセットを上から撮影したショットも、同様に後で撮影されたものであろう。

Identifying the Nitrate Negative Film of *Shigeki Nanko Ketsubetsu* (1921)

Itakura Fumiaki

At the end of 1921, the Tokyo Museum held the “Moving Pictures Exhibition,” the first government-produced exhibition on cinema in Japan. This paper attempts to identify the historical value of the nitrate negative of *Shigeki Nanko Ketsubetsu* (1921), which is in the collection of the National Film Center (NFC), from a film archival perspective. The analytical methodology used for this paper determined the film’s production date, editing method and other elements from the various traces of physical evidence remaining on the film itself. It should lead not only to an understanding of the film material, but also an illumination of the film production process and a deeper understanding of the contents of the film.

As a result, the study determined that there is an extremely high possibility that the nitrate negative of *Shigeki Nanko Ketsubetsu* is the original negative filmed by Taikatsu studio cameramen on December 8, 1921. In addition, it is also highly probable that after 1928, Nikkatsu Studio re-edited the original negative and released the film by newly adding two shots of subtitles at the beginning, the “The end” shot and also the shot of the “forest.”

It is reasonable to conclude that the negative film of *Shigeki Nanko Ketsubetsu* is the second oldest 35mm nitrate original negative among existing Japanese film material. The oldest would be the 35mm nitrate original negative of *Kobayashi Tomojiro Sogi* (produced by Yoshizawa Shoten, filmed in 1910), which records the funeral of Kobayashi Tomojiro, the founder of the current Lion Corporation. In addition, the recorded contents of *Shigeki Nanko Ketsubetsu* can also be highly regarded as historical material of great value for the scenes of Japan’s first exhibition of cinema and Yushima Shrine and the Tokyo Museum prior to the Great Kanto Earthquake (1923), which destroyed almost all of the structures within the shrine’s grounds, including the Tokyo Museum.